

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	「教師の学校」のあゆみ：文学研究と国語教育との架橋を目指して
Author(s)	永田, 裕貴
Citation	国語教育思想研究, 32 : 342 - 351
Issue Date	2023-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054836
Right	
Relation	



「教師の学校」のあゆみ
—文学研究と国語教育との架橋を目指して—

「教師の学校」事務局 永田 裕貴

キーワード：論理、大学入試現代文、小論文

1、教師の学校とは

2012年5月、前身の「国語教育をつくる会」を主宰していた難波博孝氏は、第一学習社小論文講師・長岡裕子氏、河合塾現代文科講師（肩書は当時のもの、以下同）・結城教司氏を共同主宰者に迎え入れ、試行期間を経たうえで、中学校・高等学校の国語教員向けの研究会「教師の学校」を正式に発足させ、第1回目の「定例会」を実施した。（ちなみに、小学校教員向けの研究会「学思会」、「ゆいの会」も主宰している。）

「教師の学校」は、月に1度土曜日に開催され、主に教師の学校会員を対象にした「定例会」と、会員以外にも参加者を募った「公開講座」の2種類の講座を開催する形式をとる。会員には、希望をすればいつでも登録できるし、参加できるときにだけ参加できることも可能とする、誰でも、いつでも学べる体制になっている。場所は、基本的に広島大学、河合塾広島校で開催しているが、コロナ禍を機にオンライン講座の体制を充実させ、全国どこにいても受けられるような形式に「進化」している。

「定例会」では、3名の主宰者が原則輪番で講座（ゼミ）を受け持つ。講座の内容を第1回の「定例会」の「お知らせ」から引くと、

結城ゼミ…大学入試現代文問題の読み方と解法の講義・演習／教師の「読むこと」の指導能力育成

長岡ゼミ…大学入試小論文問題の読み方と解法の講義・演習／教師の「書くこと」の指導能力育成

難波ゼミ…論理力を育成するための授業づくり

と設定してある。

次に、「定例会」の流れを述べると、最初に参加者が「近況報告」を行い（この「近況報告」から議

論に発展して、長時間にわたることがしばしばあることも「教師の学校」の醍醐味の一つである）、その後ゼミを前半に行い、後半でその他の学習をすることが多い。

そして、発足当初は、後半で「読書会」を行うのが定番だった。1冊の本を各自購入し、前もって読んできて、当日の担当者が読んで考えたことや疑問を皮切りにして議論をした。多くの場合、数カ月にわたって同じ本を読み進める形式をとった。これも前記「お知らせ」から引くと、

読書会…担当者は内容のまとめや問題点などを提出する。参加者は各自の意見を述べ、議論を交わすことで、理解と教養を深めることを目的とする。

とあり、最初の「読書会」で読んだのは『社会は絶えず夢を見ている』（大澤真幸、朝日出版社）である。実は、この「読書会」で都留文科大学教授田中実氏と山梨大学教授須貝千里氏編著『文学が教育にできること—「読むこと」の秘鑰—』を読んだことがその後の大きな展開を生むのである。

〈「読書会」で読まれた書籍や論文〉

- ・『社会は絶えず夢を見ている』（大澤真幸、朝日出版社）
- ・『文学が教育にできること—「読むこと」の秘鑰—』（田中実・須貝千里氏編著、教育出版）
- ・『文学の授業づくりハンドブック・授業実践史をふまえて第4巻 中・高等学校編』（浜本純逸監修 田中宏幸・坂口京子共編、溪水社）
- ・「教室における〈第三項〉と〈語り〉」—「十人十色を生かす文学教育」論を超えるとはどういうことか—（斎藤知也、『日本文学』2013年8月号）

やがて「読書会」に代わって「授業相談会」が定番となり、今に至る。

2、結城ゼミ

結城敦司氏は予備校講師という立場から見た、国語教育、文学教育、入試国語のあり方などを通して世界の見方、近代とは何か、などについて教授する。主に、前年度の大学入試の問題を分析し、市販されている問題集の解答をとときに辛辣に批判しながら、なぜその回答は不適なのか、「本当の」正答とはどういうものか提示することを通して、背景で受験生に求められる教養、すなわち教員が生徒に教えておかなければならない教養を交えながら講義が行われる。予備校講師が頼りがち(?)な「テクニク」とは一線を画し、膨大な知識と経験の中から我々に伝授される教養は、圧倒的な読書量と、そこから生まれる哲学に裏打ちされたもので、参加者は知識のシャワーを浴びるような時間で、すぐにでも教壇に立って、「本当の」現代文の授業をしたくなったものである。

以下、第1回「教師の学校」の「結城ゼミ」の資料を抜粋して掲載する。

現代世界について—近代国家論を読み解く—

二〇〇六年度の神戸大学入試問題である。出典は西谷修の『戦争論』からで、西谷修の文章はしばしば大学入試に出題されているが、受験生には少し手強い評論だ。

一読してイヤになった人が多かったかもしれない。まず本文が長い。それに内容が重い。ここ一〇年ほど神戸大学はほぼこのレベルで入試問題を作っている。受験生の都合などあまり考えていない、難解で超長文の課題文(大学の設定している水準を噛みしめてほしい)から出題している。これが好きだという受験生がいたら、かなり「変わり者」だろう。でも、筆者は神戸大学の入試問題が好きだ。予備校講師でも、こういうのが好きなのはやはり「変わり者」なのだろう。変わり者でいいではないか。

世界史の知識を前提にしているのだから、世界史の表面だけなぞったという人には、少々わかりにくいかもしれない。近年の大学入試の「現代文」では文明評論が主流であるため、近代文明についてのある程度の知識を持っているとかなり有利になることがある。逆に言うと知識がなければそもそも文章が理解できないこともあり得る。世界史、倫理、現代社会

などの教科書を一読してあるほうがより理解が深まると思う。

[本文と設問]

[本文解説]

一行分ほど空白になっているところがあるので、その前と後の二つに分けて本文の内容を確認しておこう。(中略、本文の内容をわかりやすく解説する。)

本文最後の二段落が比喩的でわかりにくいかもしれないが、ヘーゲル(ドイツの観念論哲学者)の弁証法を下敷きにして、〈人類〉の壮大な「世界史」が螺旋階段を上るように進展していき、それがついに完成しその運動を終えるというイメージで語られている。

こういう文章を、これから大学に行こうしている高校生や浪人生に読ませ、その力を測ろうというのだから、合格基準はかなり低いものになると思うが、その心意気は立派だ。

[本文の論旨] (略)

[設問への取り組み]

一〇〇分で三題だ(学部によって違いはある)が、古文と漢文はわりに質も量も軽いので、質・量ともに重い現代文に五〇分ぐらいはあてられるだろうか。配点も、学部によって若干違うが、現代文に過半の点が割り当てられている。とは言え、問二、問三、問四が八〇字の記述問題で、問五が一六〇字の論述問題であることを思うと、受験生にはやはりきついと思われる。いや、予備校の国語科講師や高校の国語教師でもきついただろう。

このような評論文を読み切るには、その評論文に力負けしないだけの素養が必要だということだ。その素養が、本書でことあるごとに述べてきた、現代文を読むのに最低限必要な基礎知識である。いわゆる〈現代文常識〉の習得がいかに重要であることを認識してほしい。ところが、それは高校の国語教育でもっとも手薄になっている社会科学系の基礎知識である。これは「現代文」という科目で文明評論(「現代文」の最重要テーマだ)を扱う以上、避けて通ることはできないものであるはずなのだが。

ここに、本書を執筆する最大の理由がある。文明評論を読み切るうえで避けて通ることのできない、しかし高校ではほとんど手当のされていない、現代

文読解の基礎知識（いわゆる現代文常識）をできるかぎり提示した。この西谷修の『戦争論』であれば、近代国民国家についてさらにその成立過程についてのある程度の知識を持っていなければ、たぶん読めないだろう。でも、恐れることはない。ちょっと立ち止まって考えてくれれば理解できるものだ。実際、私の教え子たちはそれができたのだから。本書を十分に活用してもらいたい。

また、「世界史」「倫理」の教科書を通読することも一つの方法だろう。

（以下略）

3、長岡ゼミ

長岡裕子氏は小論文教育について、実際に大学が出題した問題等の具体的な事例を交えながら、現場の教員へ向けて小論文教育のあり方から、具体的な添削の仕方、書き方などを教授する。

長岡氏は、第一学習社小論文講師として全国の高校生のみならず教員へ向けて小論文講座を開くために、北は北海道、南は沖縄の離島まで飛びまわる、超多忙な日々を送りながらも、その合間を縫うようにして「教師の学校」の会員に向けてゼミを開いている。それは、（「定例会」のときは）多くて30名ほどの小さな集団で、全国に呼ばれる大人気講師をまるで独り占めしているような、喜びと言おうか優越感と言おうか、その中に少しの罪悪感の混じった、至福の時ともいえるものであった。これもまた、早く自分の学校に帰って小論文の指導がしたい、と思わされるものであった。

（1）小論文教育の意義

以下は第2回「教師の学校」のゼミの予告に際しての文章である。長岡氏のこの「教師の学校」に向かうスタンスを表現したものとして最適なものであると考え、紹介する。

なぜ小論文が書けないかという、その原点の掘り起こしをしてみたいと思います。

今まで、どうやったら小論文が書けるかという、そういうかたちで動いてきたのですけれども、今回は、なぜ書けないのか、というところを、それぞれの先生方がご自分の教育現場の中から考えてきていただきたい。

私は、国語現場を知らないので、小論文しか教えておりませんので、できれば、国語現場というところから、なぜ小論文に、それぞれの先生が国語でお教えになっていることが小論文に結びついていないのか、ということを考えてきていただければ、私の参考にもなるし、また、今の高校生たちの問題点の掘り起こしにもなってくると思います。

その際、個人の資質や、家庭環境、社会環境などはおいて、とりあえずは教育論として、現場的な問題で、なぜ、今、中学・高校の国語教育の中でおこなわれていることが小論文に結びついていないのか、先生方の声を聞きたいと思っています。

もしかしたら、英語を習っているのに英語がしゃべれない、というのとはまた違った意味で、これだけ母語として国語を話し、聞き、学んできて、小論文が書けないとか、漢字が書けないというのは、すごい問題なんじゃないかという気がしてきたのです。今の高校生たちを見ていて、私は、小論文でしかつきあっていないのですけれども、これで社会に出るのかということに、すごい危機感をもっています。

それはやはり、今の教育現場にも何か問題があるように思います。そのことについて、先生方のご意見が聞きたい。次回は、先に先生方のご意見を聞いてから、ゼミを進めていきたいと思っています。

（2）「ある日の小論文授業風景を紹介します」

ここでは、標記のように題した、長岡氏が岡山県の私立高校で非常勤講師として実際に行った授業を紹介した資料を再構成して掲載する。

授業日－2018年4月28日

授業対象－（略）

準備物－B5用紙1×生徒数

授業テーマ－少子化

組み立て－

【長岡板書】

少子化

- | | |
|-------------|--------|
| ①なにが困るの | 問題点・現在 |
| ②どうしてそうなったの | 原因・過去 |
| ③どうすればいい？ | 解決策・未来 |

【長岡の発問】

（①、②、③に沿って）→生徒を席順に当てて口頭で答えさせる→答えた生徒が自分で板書

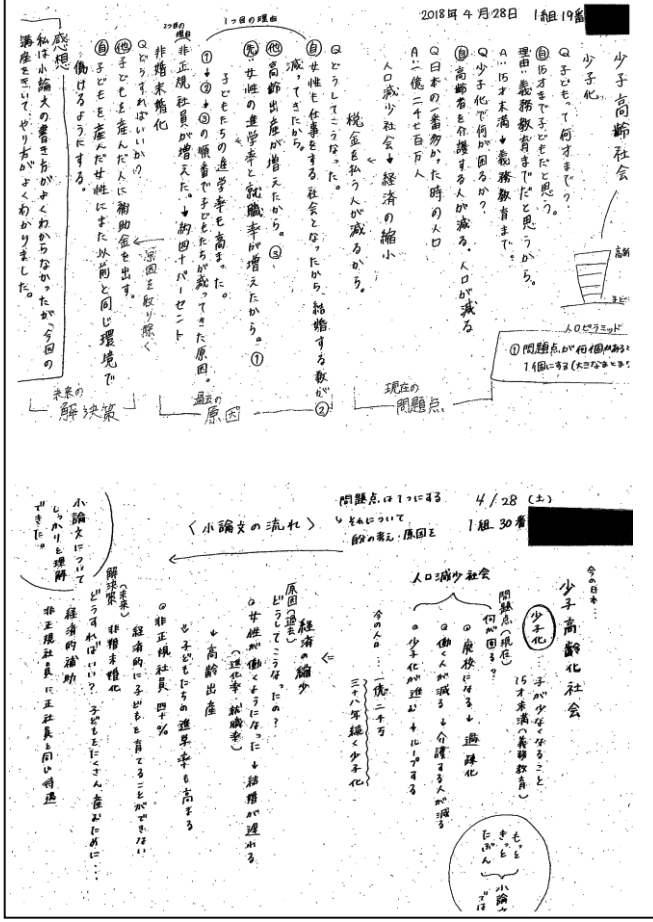
【長岡のまとめ】

【感想を書かせる】

【今回の授業の初めに「少子化に関する資料」1枚を配付】

授業後のまとめ—感想・効果

4、5、6時限目のクラスは授業開始から2回目であるが、仲良くなれたような…クラスによって差はあるが、この時間を生徒が楽しんでくれたことは実感できた。各クラスのほとんどの生徒に何らかの発言をさせることができた。口頭で言い淀んでいた生徒も黒板に向かうことで自分の言葉を精査していた。言語化を経たうえでの文章化の効果を感じることができた。社会問題に関して、知識として指導する以前の行程の重要性。



事務局が会員向けに発行している会報から、このゼミについて報告したものの抜粋を以下に掲載する。

長岡先生からご紹介いただいたのは、当然「“小論文”の授業紹介」なのですが、いつもながら実に示

唆に富んだもので、小論文に限らず国語の授業を考察するにおいても非常に有意義なご提案でした。特にみなさんが唸った所をご紹介します。

(1) レジュメの「まとめ」の中の「言い淀んでいた生徒の精査」に関する考察、「言語化を経たうえでの文章化の効果を感じることができた」について。
・生徒の考察には3段階あって、①“頭”で考える、②“口”で言う、③“手”で書く、という思考の回路を辿るように促す展開を常に考えています。そのため、添削の際にも、とにかく生徒に話させて対話をしたうえで、書き直しをするという手法をとっています。対話をすると、書いたものよりも実は良いことを言うもので、それに対して口頭で、アドバイスをします。お話を聞いていると、先生の授業では挙手を頻繁にさせたり板書させたり、発表をさせたりされているようで、生徒がアクティブに学んでいる姿が推し量られます。

【ここで添削のときのポイント】

- ①アドバイスの際にはメモを生徒が書くこと（教員が説明しながら書いたメモ等を渡すのではなく）
- ②赤ペンを入れないこと。赤を入れると、それが正解だと生徒は考えてしまうので、生徒自身で「書く」力の醸成にはつながりません。

(2) 初めに知識を与えるような授業展開ではなく、まずは考えさせてから（感じさせてから）知識を提供すること。

・知識を与えると、知識で書いてしまいます。それでは、例えば、社会課題に対する解決策を考えるような想像力は鍛えられません。だからこそ、まずは考える“場”を設定する展開の方が望ましいと言えます。

(3) ノートは極力生徒の力で書く

・添付した生徒のノート（左記）は、長岡先生が板書したものを写したものではありません。長岡先生が書いたのはポイントのみ、そして後は生徒が授業の中で思うままに書いていったものです。まずは考える枠組みを与え、その中で先生がファシリテートしながら「少子化」についてお互いの考えを共有しながら感じ、そしてそれを補足する形で教員が知識を提供する流れで構成されています。我々は板書計画を決め、それに外れないような授業をしてしまう傾

向にあります、その展開も一考すべき時なのかもしれません。教師が板書をしなくてもよい“場”を目指すべきではないでしょうか。

まだまだ書ききれないくらいの学びがありました。お越しになれなかった先生方は次の長岡先生の小論文の講座にぜひお越しください。

4、公開講座

「公開講座」では、全国から（あるときは中国やアメリカから）特別講師を招き、会員以外にも参加者を募り「教師の学校」を開催した。招く講師は各地の大学に所属する方ばかりでなく、あらゆる分野にわたる。文部科学省の教科書調査官を招いたり、西安から安倍公房の研究者を招いたり、ITセミナー講師の方やインテリアデザイナーを招いたり、といった多種多様な方が登壇した。その人脈、また、まだいわゆる売れっ子でない菅野一徳氏を2016年に熊本から招いたあたり、その慧眼も特筆すべき点である。

(1) 「教師の学校」に特別講師としてお招きした方々（2023年4月1日現在）

- ・都留文科大学名誉教授 田中実氏（2013年8月31日、同年12月14日）
- ・河合文化教育研究所 成田秀夫氏（2014年6月14日）
- ・東京大学大学院総合文化研究科教授 野矢茂樹氏（2014年11月23日、2015年8月30日）
- ・評論家 菅孝行氏（2015年3月14日、同年12月5日）
- ・熊本大学大学院教育学研究科准教授 菅野一徳氏（2016年8月20日）
- ・山梨大学名誉教授 須貝千里氏（2017年3月11日、2023年3月11日）
- ・北海道大学大学院文学研究科教授 中村三春氏（2017年8月26日）
- ・文部科学省初等中等教育局主任教科書調査官 小原俊氏（2018年8月19日）
- ・ITセミナー講師・社会人落語家 松本賢一氏（2018年8月19日）
- ・西安交通大学教授 霍士富氏（2019年7月6日）

- ・インテリアデザイナー 吉田恵美氏（2020年12月12日）
- ・東海大学文化社会学部教授・岐阜女子大学文化創造学部非常勤講師 助川幸逸郎氏（2021年3月14日）
- ・国際大学 GLOCOM 主幹研究員・准教授 豊福晋平氏（2021年5月15日）
- ・早稲田大学教育・総合科学学術院教授 五味淵典嗣氏（2021年8月21日）
- ・福山市立大学教育学部教授 森美智代氏（2021年8月21日）
- ・パルクール講師 結城啓氏（2022年3月12日）
- ・河合塾現代文講師 小池陽慈氏（2022年5月14日）
- ・ブランニュー株式会社代表取締役 内田圭介氏（2020年11月14日、同年12月12日、2021年1月30日、同年2月20日、同年12月18日、2022年5月14日、以上は内田氏が主宰する「こころもちネットワーク」との共同プロジェクト「児童文学に学び直す×人生に学び直すプロジェクト」の開催に係るもの）

(2) 田中実氏との2度にわたる対談

多くの方々をお招きした中でも、やはり『文学が教育にできることー「読むこと」の秘鑰ー』（田中実須貝千里氏編著、教育出版）の読書会で「〈第三項〉論」と出会い、直接お話を伺おうとお呼びした田中実氏との議論は「教師の学校」にとって大きな転換点となった。2013年の12月の対談を、テーブルライトから一部紹介する。ここでは「小説」と「物語」との違いを述べている。

★田中氏

だからしかけが違うんです。それは漱石も鷗外も芥川も、この小説のしかけを同時にしています。しかけを同時というのは何かと言うと、小説というのは物語を媒体にして、この物語をいわば手がかりにして、世界は何かと、これを示すんです。

★難波氏

そこがなかなか難しく、物語を、しかけというのはおそらく、この物語というのは1つのストーリーがあって、それを語り手がいて、そこで何かのしかけがあるということだと思えます。語り手が、

自分の語りた物語を合わせて出すというところにしかけがあると思うんですが、それが世界をというの。

★田中氏

要するに世界をというふうに言うのは、小説というのは、前にこういうふうに書きましたでしょうか。近代小説というのは、僕の定義で申し上げますと、近代小説は物語、これは物語が成り立つのはお話ですけれども、話らしい話のない話も、だから結局物語があります。志賀直哉の話もやっぱり物語が、ささやかだけれどあります。谷崎的な壮大なものから、ささやかなものも含めて、今物語と申し上げました。

★難波氏

これは誰が何をしたかとか、そういうことですね。

★田中氏

そうです。何かが起こったということです。物語というのは、僕の定義で言うとA地点からB地点に移動する。何か起こると移動しますので、移動するということです。

★難波氏

それは別に物理的な移動だけではないですね。

★田中氏

はい。ここに時間が流れていますので。

★難波氏

そういう意味ですね。

★田中氏

何か出来事が起こる。そうすると何かが変わる。だからここに、近代小説というのは何かが起こる、何かが変わる、移動する。この物語は、物語というぐらいですから語りです。これはもちろん語りのわけですけれども、これ自体が語りになって、語られた出来事になっています。この物語プラス語り手の自己表出と、こうなる。

★難波氏

物語も確かに語りですよ。

★田中氏

はい。物語は語りなんだけれど、この物語を語る語り手が、これを語りながら、このメタレベルに立つと言うか、この内部から逸脱して、俯瞰して、この物語を語る。つまり物語を媒体にして、語り手が何かを語るということです。

★難波氏

その時点で、もう語り手は物語を語っていることを通して、何か別のものを語っているわけですね、

もう間違いなく。

★田中氏

はい。その典型が、前回『羅生門』の話をしたと思うんですけども『羅生門』のようなものは、あの人は、もう本当に芥川龍之介というのは典型的な知的な人で、文学者であるから、つまり漱石や鷗外がどういうことを言っているか、あるいは志賀直哉がどういうことを言っているかとかということをよく考えて、考えて小説を書いてしまう。

そうすると、この登場人物と登場人物との関係が物語です。物語ということは、何かが起こるといふふうに申しましたけれど、起こるためにはその起こる主体が必要です。人間に限りませんけれども、そういう登場人物が出てくる。人物が出てきて、人物と人物の関係が、何かをやる。そうになっています。これが物語。この物語を、どういうふうに捉えて、世界は何かと語る。つまりこの語り手の主体が、これを媒体にして、己の、言ってみれば真実を、己の主観を語る。こうなると思います。

この対談を契機に、須貝千里氏を含めた3名による共編著書『21世紀に生きる読者を育てる 第三項理論が拓く文学研究／文学教育 高等学校一』『第三項理論が拓く文学研究／文学教育 小学校』（共に明治図書出版）も出版されている。

（3） 苦野一徳氏による講演会

2016年の8月の苦野一徳氏の講演もテプリライトから引く。

ちょっと余談かもしれないんですが、この前の参院選でも、若者は選挙に興味がないとかなんとかって言われたんですけども、これは若者たちを批判する権利は大人にないと思うんですね。

というのも、きつい言い方なんですけども、子どもたちは学校で多くの場合、ルールを与えられ、あれやりなさいこれやりなさいとずっとやらされてきて、学校を自分で変えるといった経験をほとんどしたことがないんです。

教室を作ることだってしなかったし、学校をつくるってことも経験なくて、で、「あ〜なんだ、自分は与えられた環境でサバイバルしていけばいいんだ」というふうに、多くの子どもがなってきたと思

うんですね。そしたら、社会が変えられるなんて思わないと思うんですよ。

でも、自分の働きかけで環境が変えられる、学校が変えられると思ったらどうでしょう。そういった感じがどんどん溜まっていけば、どんどん社会への働きかけっていうのも自然に起こってくるのではないかなと思うんですね。

学校っていうのは、「自由の相互承認」の土台、つまり民主主義を築く一番の土台ですから、ルールに押し込めるとかじゃなくて、ルールは最初はある程度与えられるかもしれませんが、段階を追って必ず一緒に作り合っていくようにしなければいけないですよ。ルールは作り合うものなんです。その事を、学校教育で教えずにどこで教えるんだと私は思うんですけど。

もう一言だけ。ルールっていうと、日本人は自由を縛るものっていうイメージがあるんですけど、それは全然違うんですよ。逆なんですよ。

ルールは、私たちが自由にするために作り合うべきものなんです。ルールなしの状態では、お互いの自由なんてあったもんじゃないで、万人の万人に対する闘争になりますけれども、ルールを作ることでどうすれば皆がより自由に生きられるかを考えられるようになる。

そのためにルールはあるわけですね。

だから、ルールを、皆が自由になるためのルールを作り合う経験っていうのをやっぱり子供の時から経験しなきゃいけないと思いますね。

執筆時点でこの講演からもう7年経つが、学校は果たして民主的な場となっているだろうか。

5、難波ゼミ

難波氏は1、で記した論理力だけでなく、文学研究や文学教育、国語教育、大学入試、その他多岐にわたることについて会員へ向けて講義だけでなく、ときに議論を交わしながら、ゼミを行った。中でも、指導要領の改訂や大学入試改革に当たっては、政策の意図をわかりやすく教授したり一方にある批判的な意見を述べたり、大学側としての考えや事情を赤裸々に語るなど、教師の学校でなければ得られなかった情報も多い。それらにまつる多種多様なツール

や報告も参加者に新たな学びを促した。例えば、感化の論理、トゥルミンモデル、U理論、レジリエンス（根っこ＝イマジネーション）、デジタルとアナログの読みの差異、等々ここでは挙げきれないほどの考察や概念を参加者に新たに提示したり、改めて喚起したりした。

どのゼミを紹介しようか、非常に悩ましかったが、2編の「難波ゼミ」について紹介する。

(1) アクティブラーニング批判

ブームを通り越して、今や当たり前のように語られるアクティブラーニングについて、綿密な調査をもとに批判的に我々に語ったゼミは、その流れに追随しようとする会員たちの目を開かせた。（そういった流れに懐疑的な、実力と熱意ある教員が集まるのが「教師の学校」であることも補足しておく）

では、平成28年10月の資料から一部を引く。

<p>アクティブラーニングに潜む欲望とその先</p> <p>広島大学 難波博幸</p>	<p>2015年以前に (正確には2014年11月20日以前に) AL(という言葉)は、 教科教育の世界に あったのか</p>
<p>cinii調査</p> <p>アクティブ(イ)ラーニング×小学・初等</p> <p>全体 75+23=98 2014以前 3+4(7%) 2015~2016(6月末現在)72+19(93%)</p>	<p>2015年以前に AL(という言葉)は、 小学校(初等)教育研究には なかった(cinii上・以下同じ)</p> <p>小学校国語科実践論文2 キーワードにのみAL</p>
<p>2015年以前に AL(という言葉)は、 中学校教育研究には わずかに6 大半は、物理</p>	<p>2015年以前に AL(という言葉)は、 高校(高等学校)教育研究には 22 大半は、物理と情報</p>
<p>小林昭三及び物理教育研究の積み重ねは、 (2105年から始まる 権威的な) アクティブラーニングの歴史からは、 見事に消されている</p>	

cinii調査 からみえること

- 初等教育においてALは理論・実践ともない
- 中等教育においては、物理と情報に理論と実践の積み重ねがある
- ただし、上記のこと(少なくとも物理教育の蓄積)は、その後のAL議論において無視されている
(権威的なALは別のルートで降りてきた)

ALは、「似非パラダイム」である。

「似非パラダイム＝パラダイムは、本来、学問研究において作り出されるべき、知の枠組みなのだが、学問的な手続きなしに、権力によって与えられた枠組みを、こう呼ぶ。ここでは、その内実は問わない。」(難波要旨)

アクティブ・ラーニングに潜む欲望とその先

- 権威的なALを、AL(笑)にとらえ、その権威を無力化すること
- 主体的・対話的・深い 学びの実践を
 - ・歴史的(通時的・縦断的)に
 - ・現在的(共時的・横断的)に
 掘り起こし、その意義を、教科教育的に語ること
(局所最適化の語り)
- 各教科教育における、上のような学びを交流し、概念化を図ること (大域的最適化の試み)○ AL(笑)の流行が消えたときも、「たらいの水」と一緒に赤子を流すことを食い止めること。

(2) 大学改革／大学入試改革時代を生き抜く論理力育成のために

難波ゼミと言え、やはり「論理」である(明治図書出版より『国語教育シリーズ ナンバ先生のやさしくわかる論理の授業 一 国語科で論理力を育てる一』が出版されているので、ぜひ参照されたい)。

そして、教師の学校発足以来の大きな教育界のトピックと言え、標記の大学改革、大学入試改革であろう。

ここでは両者が組み合わさったゼミを紹介する。ちなみに、ゼミ内では一時導入が検討された記述式問題の出題への批判もなされるが、割愛している。

大学改革／大学入試改革時代を生き抜く論理力育成のために
広島大学 難波博幸

**新しい大学入試は
潮目が変わった**

マーク プレテストの趣旨

○ 近代以降の文章(論理的な文章、文学的文章、実用的な文章)、古典(古文、漢文)といった題材を対象とし、言語活動の過程を重視します。言語を手掛かりとしながら、与えられた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて文章を書いたりすることなどが求められます。大問ごとに固定化した分野から一つの題材で問題を作成するのではなく、分野を越えて題材を組み合わせたり、同一分野において複数の題材を組み合わせたりする問題も含まれます。

マーク 共通テストの趣旨

○ 言語を手掛かりとしながら、文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて文章を書いたりすることなどを求める。近代以降の文章(論理的な文章、文学的文章、実用的な文章)、古典(古文、漢文)といった題材を対象とし、言語活動の過程を重視する。問題の作成に当たっては、大問ごとに一つの題材で問題を作成するだけでなく、異なる種類や分野の文章などを組み合わせ、複数の題材による問題を含めて検討する。

中等教育に必要なこと(2)

国語科の単元づくりとして

- 設定された状況に参入し、その状況下で、ある人物になって思考するための文学教育の授業(評論文でも詩でも古漢文でもできる)
- 複数のテキスト(文種(評論文、小説、実用文、会話記録等)、図、表、イラスト)を同時に・多面的に読む、読書の・図書館的授業
- 表現・修辞への注目する授業

中等教育に必要なこと(3)

論理力育成の実践技術

- 筆者(人物または誰か)になる技術
- 筆者(人物または誰か)に代わって脱文脈的に説明する技術(要約から敷衍へ)
- さまざまな制約条件(字数、書き方)のもとで柔軟に記述(20～120～300～1200字)できる力
- そのための論理の知識(最低限 三角ロジック)の獲得

論理論証の取り出し学習による知識獲得
論理を柔軟に(短く(要約)長く(敷衍))
表現(書く、話す)訓練

○自由研究(卒業研究)
○発表論文(長文)発表要旨(中程度)
ポスター(短文)・・・さまざまな発表の形
○読書の授業・問題解決的授業のまとめ
(大げさに考えない)
○キャリア形成につながる
・・・学力が厳しい生徒こそやるべき

論理論証の取り出し学習による知識獲得
論理を柔軟に(短く(要約)長く(敷衍))
表現(書く、話す)訓練

論理作文で遊ぼう!

目的

相手

主張
(考え)

理由

具体例

論理論証の取り出し学習による知識獲得
論理を柔軟に(短く(要約)長く(敷衍))
表現(書く、話す)訓練

ごんを助けるためにアドバイスしよう!

目的

相手

アドバイス
(主張)

納得させる
理由

言語活動のある問題解決的な授業
教材単元ではない授業

多方面からの情報の取り出し
情報の精査
考えの形成
解決策
創造

↓

各教科等の「見方・考え方」
(=各教科等の文脈)の形成へ!

課題解決学習

評論文と文学等を組み合わせて
論理と感情を行ったり来たりする
国語科授業へ

文学の授業が
誰かになること、誰かに代わって脱
文脈的な説明をすることを
生徒に意欲をもたせながら
やらせることができる

このゼミについての会報（事務局から会員に送付、2019.9.18）から該当部分のみを引いて紹介してまとめとする。

教師の学校の会員のみなさま
先週の定例会ありがとうございました。
参加者の方におかれましては、アンケートのご記入
・返信をお願いします。
添付ファイルが重たいので、2通に分けてお送りします。
当日は15名もの参加者で、大盛況でした。

【前半】難波先生による講義「大学改革/大学入試改革時代を生き抜く論理力育成のために」

興味深いのはプレテストと共通テストの趣旨を見比べたときです。さりげなく、大きな変化が書かれています。

- ・マークでは「一つの題材で問題を作成するのではなく」→「一つの題材で問題を作成するだけでなく」
- ・記述では「内容や構造を把握し、解釈することや

(略)要旨を…」→「(略)考えたことを端的に記述」、字数に関しても変更
のように変化が見られますので国語科の先生方はこちらの趣旨に関して注意深く見ておく必要があると思われます。

さらに、「論理力育成」に関してご教授いただきました。
その中のキーワードはやはり「論理」と「感情」でした。
「文学の中の論理」「評論文の中の感情」、この2語からどのような考察をされますか。
先に述べた「やはり」というのは長岡先生も以前からおっしゃっていることだからですが、論理と感情（長岡先生の言葉では「主観」）と言うのは単なる二項対立では割り切れるものではありません。

例えば、
辻先生は、評論文は感情を入れて読まないといけないという考えに至り、評論文を形容詞で表現するというのを試みているそうです。そこには筆者の（辻先生は「筆者」とは言わずに必ず書き手の氏を用いて授業します、感情を浮かび上がらせるためです）何らかの問題意識があって主張があって、そこには感情が動いているはずで、それを表現するそうです。

岡田真範先生の所で学んだ教育実習生は『羅生門』において、
老婆の悪事に関する論理を

- ・当事者2人（老婆と下人）
- ・髪を抜かれている女の親
- ・第三者

のそれぞれの視点で評価させるという授業をしたそうです。
そこには各々の感情があります。それによって、論理に対する評価は異なってきますので、やはり論理と感情は切り離すことはできません。

その他にも「脱文脈化」など参考にすべき事項が盛りだくさんです。
ぜひとも資料をご覧ください。

6、おわりに

国語教育はどうあるべきか、いや、そもそも国語教育とは何なのか、決して偉ぶることなく、会員と共に考え、悩み、一緒に新たな地平を見出そうとするその姿勢は、（師に対する失礼を承知の上、最大の敬意を込めて言うと）まるで同志のような立場で会員と歩んできた。そして、その歩みは未だに止まっていない。

ときに舌鋒鋭く権威を批判し、ときに現場からは推し量れない権威の文書やその意図をわかりやすく解説しながらも、ユーモアあふれる話術で、肩肘張らない、常に現場の子どもたちに、そして現場の教員に寄り添った温かな研究会になっているのは、難波氏を始めとした主宰者の実力、そして何より人徳のなせる業である。

本当に「教師の学校」は「学校」なのだ。共同主宰のお二人も含めたみんな、難波先生を慕って、毎月都合のつくときは集まり、わいわい語り合った。おそらく我々には想像も及ばないほど憤り、戦いに傷つき、絶望や落胆をしていたのだろう。しかし、難波先生はいつもオモロかった。ツッコミあり、イジリあり、そして笑いあり、の素敵な教室であった。

私事を申せば、私が大学3年生のときに所属していたのは初等教育の算数ゼミであった。しかし、どうしても高校の国語教員になりたい気持ちが芽生えてしまい、例外的に異動を認められて4年次から所属したのが国語の難波ゼミであった。その異例のわがままから始まって、今思い返すと（本当は思い出したくない）、恥ずかしすぎる言動を受け容れ続けてくださった難波先生には感謝してもしきれない。つい最近の講座の前の雑談の中で、難波先生が「誰も私のことなんて尊敬してない」というようなことをおっしゃっていた。もちろん難波先生流の冗談であるが、僭越ながら、難波先生に関わるみんなを代表して反論したい。

「みんなめっちゃ尊敬してますよ！」

さて、文学教育が危機に瀕している現状において、文学研究と文学教育との架け橋となるという難波氏の使命感に共鳴した、現場の教員は数が知れない。そしてその動きは助川幸逸郎氏や中村三春氏、五味淵典嗣氏、田中実氏、須貝千里氏といった、大学の文学研究者をも巻き込んだ大きなうねりとなりつつある。

最後に難波氏の近著から国語教育、文学教育、文

学研究にかかわるすべての人々に肝に銘じておいてほしい文章を紹介して結びとする。

『21世紀に生きる読者を育てる 第三項理論が拓く文学研究／文学教育 高等学校一』（以下、『高校編』）が出版されたのは、二〇一八年十月であった。それから四年、世界も国語教育界も、大きな時代の波に洗われた。本書が出版されて数年も経てば、このような時代の波は消え、人々の記憶からも消えてしまっているだろうか。それとも、困難な日々（戦争や病禍）がずっと続いているだろうか。

国語教育における文学教材の授業（文学教育と言われることが多い）の困難は、おそらく続いているだろうと私は予測している。それは、高等学校の国語科目再編といったことを指すのではない。この困難は、この国においてずっと続く困難である。それを、「国語教育の危機」などと、当事者でもあるはずの人々が今更言い立てることへの絶望的な困難である。それは、文学研究（大人の文学も子どもの文学も含めて）と国語教育の、溝である。このことについては、私は何度も言い立ててきた。『高校編』は、その溝を、両者から埋めようとする試みであった。

本書は、『高校編』に続く『小学校編』である。「国語教育の危機」とやらに含まれて議論されることが殆どなかった、小学校国語科文学教材に関する書籍である。といっても、小学校においても、先述の「困難」はなんら変わりがない。本書が、溝を埋め立て、文学研究と国語教育の両者を更地にし、「危機」とやらを一層なきものとしてしまえる「いつか」を夢想している。

難波博孝

（『第三項理論が拓く文学研究／文学教育 小学校』（田中実、須貝千里、難波博孝編著 明治図書出版）「あとがき」より）

なお、難波博孝氏の広島大学退職に係り、本研究会を含めた各研究会は「一般財団法人こころもち学習ネットワーク」へ移行する予定である。